



50th Anniversary Of Sound Of Silence Single Record!



Simon & Garfunkel Web Forum Off-Line Meeting 2015

MENU 本日のメニュー

(13時開始)

■ こうもり&けんご&イッシー

American Tune, Homeward Bound, The Boxer ほか

■ S+G

We've Got a Groovey Thing Goin', Cloudyほか

■ 自己紹介タイム

(ようこ, Gacha, チアキ, イサム, 小糸, Chie, うらうめ)

■ ひろみつさん

25Years, Watermark, She Moved Through The Fair, Armistice Day

■ 大口さん

Leaves That Are Green

■ ばあとさん

Duncan, One trick pony

■ BP&MEVA&KAZU

Peace Like a River, Under African Skies, Cecilia

■ 7thAvenueさん

レアレアS&G ~ 音源と映像のご紹介

■ 高橋さん

April Come She Will, Baby Driver

■ 「元気です」島田マスター&高畑さん

The Sound Of Silence, Scarborough Fair

■ Ash

He Was My Brother, Sparrow, Bleecker Street ほか

■ イッシー&バツシー

Train In The Distance, Late In The Evening, The Obvious Child ほか

■ クロージング

Bye Bye Love

(18時終了予定)

ごあいさつ

S&G会議室 こうもり

はじめに

今年、『サウンド・オブ・サイレンス』のフォーク・ロックアレンジされたシングル盤が発売されて50周年です。S&Gデビュー50周年だった昨年から、次々といろいろなアニバーサリーがやってくる50周年フィーバー期に入りましたので、これからどんなアニバーサリーを祝うべきか、オフ会のなかでみなさんで検討していきましょう。

演奏オフ会も1998年にはじまって、今年でもう17年。始めたころは10年までは何があっても毎年やろう、と決めていたのですが、近年はパンフの編集以外、お店とみなさんに丸投げ状態（笑）でそれほどの負担も感じませんので、状況が許す限り30年くらいまでは続けられそうな気がしています。

今年は数年ぶりに開催時期を変更しましたが、実はその結果、新潟のくまさんが稲刈り時期にぶつかって出席できなくなってしまいましたので、来年はシルバーウィーク初日などへの再変更も検討したいと思います。ただし9月にはいると猛暑が終わって体が少し楽に感じますし、みなさんのやる気も例年より高まっている気がしますので、9月開催自体はしばらく続けてみたいと思っていますが。

81CPの生音源

今回のオフ会が近づいてから、1981年のセントラルパークコンサートの、おそらくラジオ生中継時の音声を金刺さんが入手され、興味津々で聴かせていただきました。アーティが全曲ボーカルを録りなおしているという事実は、ロイ・ハリーの暴露証言で明らかになっていましたが、具体的にどう改良したのかについては、これまでうわさのレベルを出ないものばかりでした。

それが今回、詳細に比較することが可能になりましたので、早速オフィシャルCDと聴き比べを試みたところ、以下の点が確認出来ました。

- ① アーティは本当に全曲録りなおしを行っているが、元のボーカルはロイ・ハリー証言で言われているほど酷くはない。
- ② ポールもミセス・ロビンソン、Still Crazy、50ways、American Tuneなど数曲を全体的に録りなおしている。特に音程のはずれた箇所は、結構細かく修正している。
- ③ American Tuneはボーカル再録時にコーラスパートを編曲しなおして、3番は全く違うメロディに変更されている。その箇所は当然映像とも口が合わなくなるので、ビデオでは3番の大サビ「and sing an American tune」のところから、後姿の映像に切り替わっている。
- ④ ポールのギターについても、Americaのイントロなど、弾き間違いの修正箇所がある。

これらの詳細については、みなさんのご協力も得ながら、来年までに詳しい比較結果をまとめたいと思います。

2014年12月、アーティが 日本に戻ってきました♥♥♥

Art Garfunkel Japan Tour 2014

Chie

2014年12月、アートのソロツアーが13年ぶりに日本に戻ってきました！2009年S&G来日ツアーからも5年ぶりです。12月10日・11日の東京・渋谷公会堂2公演に行っていました。

アーティはS&G来日ツアー後、ニューヨークのレストラン(註)でロブスターを食べていてのどに引っかかり、声帯を痛めてしまっていました。それ以来、誰もいないコンサートホールを借りてリハーサルをしたり、小さなギャラリーで数十人のファンだけを前に公開リハーサルのようなコンサートをしたり、試行錯誤を繰り返していました。2012年にはスウェーデンでのフェスティバル出演を当日キャンセルして、「アート・ガーファンクルがスウェーデンで行方不明」というヘッドラインが流れてしまったりもしていましたが、2014年、アーティが本格的にライブに戻ってきました。

物心ついて以来、声をアイデンティティの中心に考えてきたであろうアーティが、もう歌えなくなるかもしれないという恐怖に向かいあい、練習を繰り返してステージに戻ってくることがいかに大変だったかを想像すると、アーティも、もう70代ですので、ライブをやめるという選択肢もありえたと思います。そう考えると、日本でまたアーティを聞けるということ自体が奇跡的なことだったのかもしれない。

声帯を痛めて以来、中音部が出にくくなったということで、以前よりももっと丁寧に、そしてやさしく歌っていました。” Mrs. Robinson” など声を張り上げないと歌えない曲は、セットリストから一掃されていましたが、結果的にわたしの好きな曲の割合が増えていましたのでうれしかったですり・・・。



途中にアーティ自作の散文詩の朗読が披露されましたが、公式サイトにも掲載されている” 13 bits” という連作から2012年5月の作品も取り上げられました。アメリカ横断中に、牛の群れに向かってミュージカル・ナンバー” Old Man River” を歌うという詩で、最後に” I AM 'feared o' dyin” (死ぬのが怖い) という歌詞の引用があります。その詩にすぐ続けて、死についての曲である” Bright Eyes” を歌い始めるという構成はなかなか素敵でした。観客にどのくらい伝わったかは不明ですが。

すっかり大きくなった長男のジェームズくん (今はArthur Jr.という名前で活躍しているそうです、もう24歳・・・) も帯同し、親子二人のデュエットも楽しそうでした。肩の力が抜けていて、とても暖かい雰囲気のリブでした。

“Bridge” は、「今できるのはここまで」と1番だけでした。アーティは、声帯を痛める前には「途中までの” Bridge” をライブで歌う」なんて絶対に自分で許せなかったでしょうが、声帯を痛めたことで、完璧ではない自分を許せるようになったのかもしれないと思いました。

これが最後の来日になってしまう可能性もあるかもとは思いつつ、今回来日してくれたことがとてもうれしい、そしてとても素敵な東京公演でした。

<12月10日セットリスト>

1. And So It Goes
2. The Boxer
3. Perfect Moment
4. A Heart in New York
5. All I Know
6. A Poem on the Underground Wall
7. Scarborough Fair / Canticle
8. Corcovado (Quiet Nights of Quiet Stars)
9. The Side of a Hill
10. For Emily, Whenever I May Find Her
11. April Come She Will
12. Real Emotional Girl
13. Let It Be Me
14. Take a Message to Mary (By Arthur Jr.)
15. Wednesday Morning, 3 A.M (By Arthur Jr.)
16. Smile (By Arthur Jr.)
17. Homeward Bound
18. Bright Eyes
19. 99 Miles from L.A.
20. The Sound of Silence
21. Kathy's Song
22. Bridge Over Troubled Water
23. The 59th Street Bridge Song (Feelin' Groovy)
24. Devoted to You
25. Now I Lay Me Down to Sleep

註)ちなみに、”The Palm”というレストランだそうです。全米にお店があるようですので、次回のアメリカ旅行の際にいかがでしょうか。http://www.bilerico.com/2013/09/consider_the_lobster_art_garfunkel.php
<http://www.artgarfunkel.com/13bits3.html>

ペニー・マーシャルの手記

“My Mother Was Nuts” Penny Marshall より抜粋試訳

ようこ

1979年後半、ペニー・マーシャルがロブ・ライナーと離婚してしばらくの頃

キャリー(フィッシャー)はこのとても辛い時期の間助けになってくれた。電話や直接会うのに加えて、仲人役までしてくれた。私に歌手のアート・ガーファンクルを紹介してくれたのだ。彼は街にいて、ハリウッド・ブルーバードの目立たないホテルに滞在していた。その日キャリーはポールと喧嘩中だった。ポール・サイモンについての愚痴を言うのに、くっついたり別れたりのパートナー、アート・ガーファンクル以上の相手がいる？

私たちはアートがいるホテルにいた。キャリーがほぼ全ての注意を集めていたが、アーティと私は意気投合した。彼は長年のガールフレンド、ローリー・バードの自殺からずっと続く鬱状態の中にあっただ。私も意気消沈している時期だった。完璧な組み合わせだった。私たちは『同病相憐れむ』という慣用句の生きた見本だった。



1980年

次にニューヨークにいた時もLSDをやった。私はキャリーとポールと一緒に、民芸品を買いに出ている。ポールのアパートメントを出るときに、キャリーと私はまたアシッドを摂取した。私たちの狂気には理由があった。楽しかったのだ。謝罪するつもりはない。私たちは大笑いした。冒険と未知の感じが加わって楽しかった。この場合の予期せぬ結果は移動だけだった。われわれはリズムジンのドライバーを15回変えていた。ほんの少しでも普通でないことがあるような気がしたら、新しい車とドライバーを呼んだのだ。

ちょっとしたパラノイアは何でもなかった。実際、キャリーが間違っただけで煙草でなく毛皮のコートに火をつけてしまったとき、私たちは冷静に対処したのだ。午後までには、民芸品なんてよしにして、ニュー YORK のマジパンを探しに出ている。やっと千鳥足でポールのアパートメントに帰着いたとき、私はアーティとデートの予定なのを思い出した。一日中アシッドの影響下にある時によくあるように、そのことをすっかり忘れていたのだ。

スティーヴン・ビショップとカレン・アレンとダブルデートの予定だった。アーティに電話して、ポールのところにいるので迎えに来てほしいと頼んだ。

彼は「単にポールのところに行くなんて僕にはできない」と言った。

「なんでだめなのよ？」と私は聞いた。

60年代～70年代に、彼らが『サウンド・オブ・サイレンス』や『明日に架ける橋』など、絶大な人気を誇り、不朽のものとなった音楽と一緒に作っていたということ以外、私は彼らが共にした長い歴史を全く知らなかった。とても複雑に入り組んで、取扱いの難しい彼らの関係には気づいていなかった。二人は小学校時代からお互いを知っていた。友人であるときもあり、そうでないときもあった。私は彼らが数年間口も利かないこともあるなど知らなかった。自分の問題だけで手一杯だった。

最後には、アーティはなぜ自分がポールのところに行くことができないかを説明した。招待されなきゃいけないんだ、と彼は言った。招待なんてくそくらえよ、と私は言った。どうでもいいと思った。彼の話にはついていけなかった。私はトリップしていたので、ポールの家を一人で離れることはできないのだ。ついに、彼は理解して私を迎えに来ることを承知した。

彼が実際に来てみると、すべてうまくいっているようだった。彼とポールはお互い友好的だった。私はアーティにアシッドを1錠あげた。「ほら、一緒にやって」

私たちはキャリーとポールもディナーと一緒に来るように誘った。彼らは丁重に辞退した。よかったらなにか買ってくるわよ、と私は提案した。思い返すとおかしい。いわばポップミュージックの歴史上もっとも張り詰めたパートナーシップに全く無知なこの私が、親睦デートのお膳立てをしていた。神のみぞ知るあいだ、お互いに関わりを持ちたくないと思っていたこの二人の。

外に出て、アーティと私はタクシーに乗り込んだ。そしてアシッドのおかげで、ぴったりとくっついていて、レストランに入ったけれど、スティーヴンとカレンは見つからなかった。15分後、違う店に入ってしまったのだとわかった。隣の店に入るはずだったのだ。その店に入って、楽しく過ごし、ポールのところに戻った。そこでも楽しい時間は続いた。話の流れで、私は他意なくこう言った。「あなたたち二人で、何か歌ってくれない？」

気まずい沈黙の後、ポールとアーティは肩をすくめた。私の推測では、彼らはそうしない理由を思いつかなかったか、単にキャリーと私の目の前で無視と口論の数年間に突入したくはなかったかだと思う。ポールは立ち上がり、ゆっくりとギター用クローゼットに向かった。それから彼とアーティは部屋の中で最も良いエコーとサウンドが得られる場所を注意深く探した。そして彼らは歌い始めた。彼らの作品ではなくオールディーズを演奏したが、素直に言って、それは私の人生の中でも一番スリリングな夜だった。

アーティと私はリチャード・ドレイファスのアパートメントで夜を過ごした。街を離れるときに、私に鍵を預けてくれたのだ。私たちは部屋に滑りこんだ。最高の夜だった。これ以上のことなど望むべくもなかったが、それが起きた。アーティが『きっとどこかに(There's a place for us)』を完璧な美しさで、私に対してセレナーデとして歌ってくれたのだ。彼はその歌に私たち二人の人生の感情と意味を込めていた。彼の悲嘆、私の新しい生活、そして私たちがお互いを見つけたという事実。その時、確かにその歌は私たちについてのものだった。

こんなことがあったら、恋に落ちるに決まっているでしょう？



ポール&Sting ヨーロッパツアーレポート

On Stage Together in Europe 2015 - Paul Simon & Sting 2015 Euro Tour Report

Blankpaper



2014年から始まった、Paul Simon & Sting On Stage Together Tourは、全米ツアーを経て、2015年にオセアニア、ヨーロッパツアーが行われることになった。前年、狙っていたNYC公演に仕事の都合で行けず、残念に思っていた私は、今度こそ、と考えて、スケジュールを調整した。今回も厳しい状況だったが、なんとか、3月23日のオランダ、アムステルダム公演と翌24日のベルギー、アントワープ公演に行く予定が立った。アムスの会場であるZiggo Domeは、2012年にGraceland 25周年ツアーで訪れたことのある会場で土地勘もある。アントワープは初めて行く都市だが、会場は中央駅前からトラムで6分足らずのようで、そんなに苦労せず行けそう。アムステルダムではちょうど以前から見たいと思っていたお気に入りの演出家が演出するオペラ（モーツァルト『魔笛』）が上演中だ。25日にアントワープからアムスに戻って、それを見るという旅行日程とした。

2012年のツアーの時は、オランダ公演のチケット取りに苦労した。というのも、ネットで日本のクレジットカードでは認証が通らず、正式なプロモーターからチケット購入できなかったのである。この時もベルギー、ブリュッセル公演と合わせて行ったのだがなぜか、ベルギーのチケットは日本のカードで買えた。国ごとにチケットセラーが異なるので仕様も違うのだ。セキュリティーや転売対策なのだろうか、このオランダの仕様には困って、結局その時はチケットを転売業者？に依頼して手に入れたのである。

今回もそんなことになるのでは、と思っていたが、なぜか発売日にプロモーターのウェブサイトアクセスするとあっけなく日本のクレジットカードが通り、買ってしまったのである。3年の間にまたシステム仕様が変わったのだろう。チケットはネットで送られてくるバーコード付きのpdfを印刷すればよい。最近はこの方式が増えてきた。

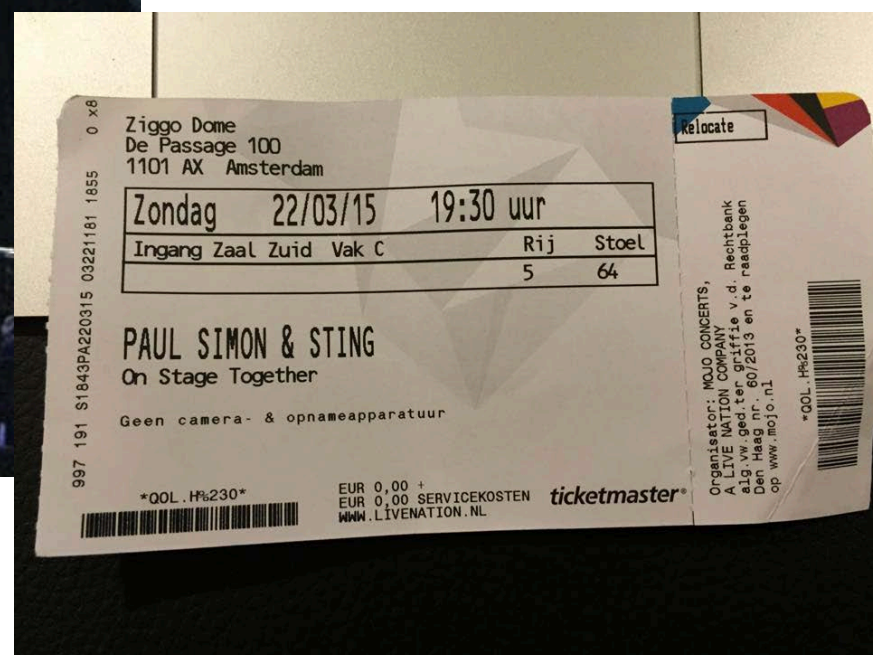
3年前のGraceland Tourの時は、アムス、ブリュッセルの両会場とも、アリーナはスタンディングで、早い者勝ちで一番前に行けたのだが、今回はアリーナも全て指定席だった。ウェブサイトからチケットレベルを指定すると具体的な座席を返してくるタイプである。1列目はVIP席となっており、たしか67万円くらいの額だったと思う。まあそれだけ払えば真ん前で見られるのだから合理的といえは合理的ではあるが、さすがにそこは厳しいのでその次のレベル、とはいえこれも3万円近い額だが、選んでみるとアムステルダムでは1列目の端の方が指定された。まあいいだろうと購入。アントワープはまた別のサイトだが、同じようなレベル指定で、これは2列目中央がとれた。このことが後に大きな違いを生むのだが、本人はまだ何も知らない（笑）

そして2015年3月23日がやってきた。月曜日の昼、成田をKLMのアムス直行便で出発。そう、アムスに到着するのが同日午後3時過ぎ、そしてその足でホテルにチェックインし、会場に向かうのである。これは強行軍。おすすめでできないが、前日発だと日曜日発になるため航空料金が高かったのである。しかしなんとか無事時間通り到着、空港から中央駅へ向かい、徒歩で数分のホテルに問題なくチェックイン。そしていよいよ会場のZiggo Domeへ向かう。地下鉄のチケットを買うのにやり方を忘れていて少し手間取ったがこれもなんとか購入。20分くらいで最寄駅に着いた。19:30開演だが、1時間前には着いていたと思う。春の夕暮れの空がまだ明るい。気温はまあ東京の2月くらいだろう。前回来た時は、うらうめさんやフランスのニコラと一緒に終演後ポールに会うことができたのだが、今回は一人だし、そういうことは期待していない。

すでに開場していたので入場する。すごい人ごみだ。まずはグッズ売り場をチェック。Tシャツがかなりの種類売っている。パンフと気に入ったTシャツを二枚買った。ここでは以前クレジットカードが使えたのに今回は現金かデビットカードのみ。逆に不便になっている。ヨーロッパ経済、やはりよくないのかな、とちょっと気になりつつ、客席に入り、座席を確認して驚いた。



1列目は一列目なのだが、100席くらいある一列目の一番右の端の端なのである。ステージ上の大きなスピーカーシステム（2012年の時はこのスピーカーのまん前に立ってかぶりつきだった）よりはるかに右寄りなのである。つまり、バックミュージシャンは左端に出てくるマーク・スチュアートくらいしか見えず、ポールとスティングも、中央のマイク位置にいれば見えるが動き回られたらすぐにスピーカーの陰に隠れて見えなくなってしまうような位置なのである。ベースのバキチやリードギターのビンセントなんか全く見えないではないか。明らかに客席プランのミスだろう。もちろんステージの上、両サイドには巨大なプラズマディスプレイがあるわけだが、これは逆に真上過ぎて見えにくい。最悪である。「こ、これはやられた！」すばやく頭の中で回避方法を考えるが何も出てこない。始まった途端、1列目の前に出て行ってかぶりつきになるか…しかしそれは多分1列目のVIPの人たちに叩き出されかねない。しょうがないのでステージ全体が見える後方に下がって立ち見を決め込むか…まだその方が楽しめそうである。大枚3万近く払って、いやいや日本から来てるんだから、もっと高いエアチケット払って、この仕打ちか…「絶望」という言葉が私の脳裏をよぎった。しかし、神は存在したのである。それも沈黙していなかった。係員の大柄な女性が近くの客に何か話しかけているのである。どうやら、希望すればこの一帯の人はもっと見やすい席とチケットを交換してくれるらしい。オランダ語ではわからなかったが英語でも話していてちらっと聞き取れたのである。よし、これに賭けるしかない。

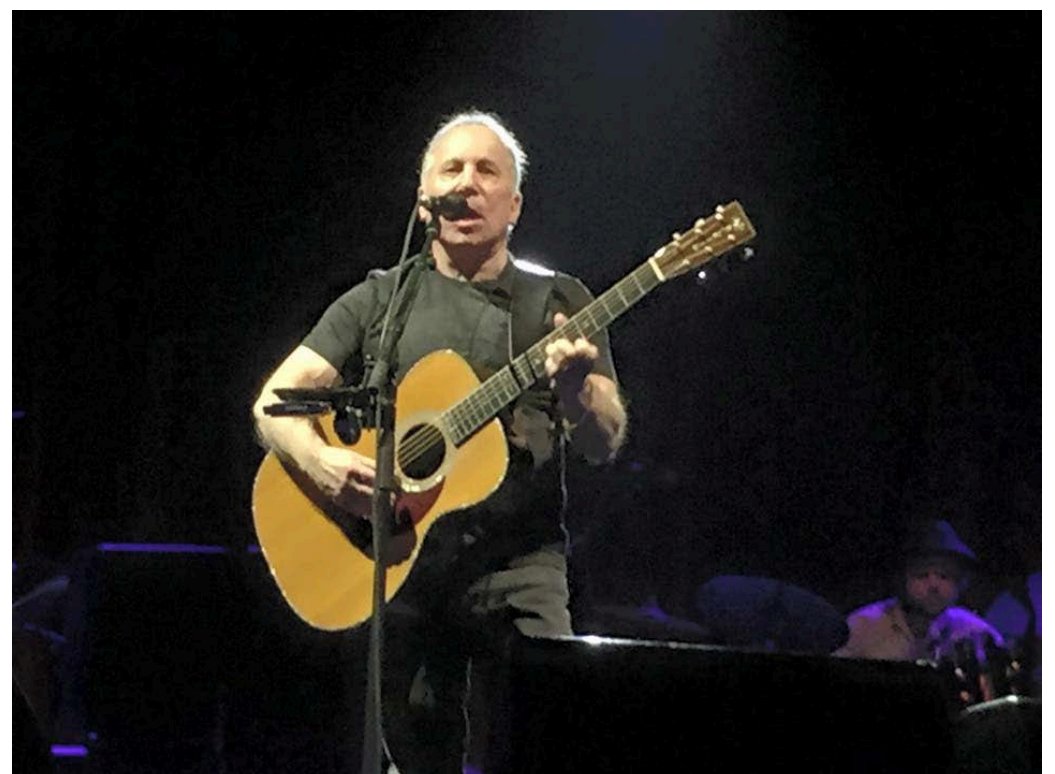


係員の女性は、アリーナの外にみんなを連れて出て行って、ロビーの端でチケットを交換するらしい。10人以上の観客が彼女を取り囲んだ。順番にやるから待ちなさい、と言いながら係員はチケットを交換していく。私も交換できた。座席番号に従って行ってみると今度はかなり左だが5列目で、前よりはずっとまともに、ステージの奥まで見える。逆に左奥のブラスセクションがほとんど見えないが、これはもう仕方ない。しかしなぜこのあたりの席が当日まで空いていたのか？招待席にしてはあまりよくない席だが…謎ではあるがまあいいや。そうこうするうち開演である。

大歓声の中、ポールとスティングが登場、最初の曲、Brand New Dayが始まった。続けてPaulの曲、The Boy in the Bubbleどちらも二人で歌う。終わると、Paulが第一声、Welcome to 16 pieces band! (16人編成のバンドへようこそ!) そしてお互いがお互いを紹介する。なぜか、PaulはSting, Stingと二回、名前を読んでしまい、Double Sting!とおどけて付け加えるようなリラックスした出だしである。

Set List (アムステルダム、アントワープとも同じ)

- | | |
|---|---------------------------------------|
| ・ Paul and Sting | ・ Sting |
| 01.Brand New Day | 18.America |
| 02.The Boy in the Bubble | 19.Message in a Bottle |
| 03.Fields of Gold | 20.The Hounds of Winter |
| 04.Mother and Child Reunion | 21.The End of the Game |
| ・ Sting | 22.Roxanne |
| 05.So Lonely | 23.Desert Rose |
| 06.When the World Is Running Down, You
Make the Best of What's | ・ Paul and Sting |
| 07.Still Around | 24.The Boxer |
| 08.Englishman in New York | ・ Paul |
| 09.Driven to Tears | 25.That Was Your Mother |
| 10.Walking on the Moon | 26.The Cool, Cool River |
| ・ Paul and Sting | 27.Hearts and Bones |
| 11.Mrs. Robinson | 28.Mystery Train |
| ・ Paul | 29.Wheels |
| 12.50 Ways to Leave Your Lover | 30.Diamonds on the Soles of Her Shoes |
| 13.Dazzling Blue | 31.You Can Call Me Al |
| 14.Graceland | ・ Paul and Sting |
| 15.Still Crazy After All These Years | 32.Cecilia |
| 16.Me and Julio Down by the Schoolyard | 33.Every Breath You Take |
| ・ Paul and Sting | 34.Bridge Over Troubled Water |
| 17.Fragile | ・ Encore (Paul and Sting) |
| | 35.When Will I Be Loved? |



Setlistを見ていただくとわかるように、PaulとStingのセットが前半と後半のように完全に分かれているわけではなく、二人で登場して、01~04まではお互いの曲を二人で演奏し、Sting一人のパートとなり、05~10、そして再び11の「ミセスロビンソン」はPaulが再登場し、二人で演奏、その後Stingが引っ込みPaulのパートとなる、というようにシームレスに数曲ずつ歌っていく。

客席にはそれぞれのファンが混在しているので、盛り上がる曲も違ってはいるが、基本的には両者ともヒット曲を持ってきているし、ノリのいい曲も多いので、立つ、座るの違いはあれども、シラっとしたりファンでない方のステージでトイレに立つような人たちはほとんど見かけず、観客にとっては3時間ぶっ続けの濃厚なギグとなっていた。

会場は、スマホ、デジカメ撮り放題といった感じで、誰も咎めるものがない。私も持ち込んだ小さなビデオカメラを開演前に床に落としてしまったのだが、係員が笑って拾って渡してくれるような環境だった。携帯の電波ももちろん入る。

バックミュージシャンもそれぞれのセットに従ってPaulとStingのバンドが入れ替わっていくが、完全に入れ替わるというわけではなく、時にはステージに残って自分のバンドでない方のセットに彩りを加えることもある。例えば、Stingバンドの女性ボーカリスト、Jo Lawryは全バンドメンバーのうち紅一点だが、PaulのDazzling Blueにコーラスを加えていたり、The Boxerでは、いつものVincent Nginiに変わって、Stingバンドのギタリスト、Dominic Millerが、Paulとの最後のギターデュエットを奏でていた。万能選手のMark Stewartは大忙しで、バックバンド中、一番ステージにいる時間が長かったのではないだろうか。ベースのBakithi KumaroはThe Boy in The Bubbleで、Stingとベース対決のようなシーンもあった。

Paulのセットは、前半の50 WaysやStill CrazyなどのMatureな曲から、後半は次第にアルバムGracelandを中心としたノリのいい曲に移っていく。Paulもノリノリで、Call Me Alでは、会場に向かって、立て立て！と煽っていた。どんだけ元気なんだ、このおっさんは！とあきれられるほどである。個人的に印象に残ったのはThe Cool, Cool River。アルバム「リズムオブザセインツ」収録のこの曲は今まで何度かライブで聞いてきているが、レコードと同様、とにかくカッコいい。あまり有名ではないので、会場はやや落ち着いた感じだったが、これと最新アルバムSo Beautiful So Whatから生き残った唯一の曲となったDazzling Blueが、「通」の私としては（笑）最も聞けてよかった曲だ。

反対に、ここ数年の定番であった、アコギ一本のSOSはセットリストから外れていて聞けず、残念だった（その後のイギリスに入ってから幾つかの公演では、セットリストが変わり、SOSやHomeward Boundが歌われたらしい）。





もう一つ個人的に残念だったのが、前回に見た2012年のバンドには参加していたアコーディオン、キーボード奏者のTony Cedrasがバンドメンバーにいなかったことだ。彼はベースのBakithi同様、グレースランド時代からの重要なバンドメンバーだったが、どうやら2014年のツアーからは参加していないようだ。どうしたのだろうか。事情はわからないが大変残念である。Paul Bandには代わりにアコーディオン奏者として、Bruce Barnesが参加していたが、その他のメンバーはトランペッターとしてC.J.Camerieriが加わった以外は「いつものメンバー」であった。

Sting Bandで眼を引いたのは、バイオリン（Electric Fiddleとプログラムには表記）奏者の、Peter Tickellである。Peterというのだから男性だと思うが、若く、金髪の長髪、細身でお尻がぷりぷりしているため、男性だか女性だかわからないような風貌をしている。が、演奏は非常に激しく男性的で、ある曲の演奏ではバイオリンの弦が切れてしまっていた。その迫力に驚かされた。

Stingの曲で印象的だったのは（もちろんS&Gファンの視点からということだが）、中盤で、S&GのAmericaをギター一本で弾き語りをしたことと、終盤のPaulとのBridge Over Troubled Waterだろう。Americaを歌う前には、トークが入り「自分の思い出には、いつもPaul Simonの曲があった。若き日の恋が始まった時、そこにはPaul Simonの曲があった。恋が終わった時も、別のPaul Simonの曲があった…」と喋って笑いを取り、歌い始めた。すごい声量で歌い続けて来たせいかな、こういった静かな曲ではかなりかすれた声になってしまうが、それも一種の味になっていた。途中からは弦と女性コーラスも入り、詩情豊かに歌い上げていた。

BridgeではS&Gのライブ（2003年以降）のArtieのパートをStingが歌うかたちになっていた。Stingの声質はArtieとは全く違い、Artieが繊細な糸だとすれば、Stingは硬質なワイヤーといった感じの力強いボーカルで歌い切る。S&Gバージョンとは演奏はほとんど同じだが、かなり印象の違うBridgeであったが、会場は大歓声に包まれた。

アンコールは、Everly Brothersの曲、When Will I Be Loved?を二人で1曲だけ歌ってあっさり終了。確かに最後にどちらの曲を歌って終わるか、というのは難しい問題で、カバー曲を1曲だけ、というのは妥当だろう。

終演はだいたい22時ごろ。3時間のコンサートがあつという間であった。今回は開幕前のミュージシャンとの交流もなかったので、出待ちも難しかろう、とあっさり切り上げて帰途に着いた。ホテルに着いたらぐったりか、と思ったが興奮あまり眠れなかった。

翌日のアントワープ公演は、Sportpaleisという会場で行われた。コンサートのセットリストや雰囲気には変わりはないので、こちらは簡単に済まそう。

オランダのアムステルダムからベルギーのアントワープは、高速鉄道タリスを使用すると1時間ちょっとで着く。東京、静岡間くらいの距離と考えればよいか。24日はアムスでゆっくり昼食をとった後、タリスでアントワープに向かった。ホテルはアントワープ駅のすぐそばで問題なくチェックイン。ここからトラム（路面電車）で会場の最寄り駅まで向かう。アントワープ公演ではチケットにトラムの乗車券が含まれており、ただで乗ることができる。とはいえ実際は改札がないので、トラムチケットを買わないで乗っているとチェックが来た場合のみ高額の罰金を払うというシステムと思われる。ドイツなどもこういうシステムが多い。もしチェックがあつたら、コンサートチケットを見せれば大丈夫、ということらしい。

アントワープの座席は、2列目中央ということでアムステルダムの不運をふっとばすような良席だった。ポールが歌い始めると、目があるのではないかと錯覚してしまう距離だ。実際もしかしたらカメラを持ったへんな東洋人がいるな、どこかで見たことあるぞ、と思っていたかもしれない。この距離なら、例の、阪神タイガースの帽子をかぶっていけば何か言及してもらえたかもしれない、とちょっと後悔するくらいだった。

すぐ前の1列目はやはり高額のVIP席なのだが、私の少し左側に、若い女性が二人いて、スマホでStingを撮りまくっていた。多分Stingの熱狂的ファンなのだろう。ついには、Stingが歌っている姿を背景に自撮りを始めた。このアントワープの会場の入り口には一応、録音、録画禁止の表示があつたのだが、やはり誰も守っていない…。



アンコール曲が終わって、この二人の女性の一人が、メモのような紙切れをStingに一生懸命差し出して見せていた。多分、メッセージが書いてあるのだろうと思ったが、Stingはちらっと見て何も言わなかった。しかし、Paulはそれをよくよく眺めて、発言。「彼女たちは、Stingのミュージカルを見に行っただ。とてもよかったと感謝してるよ！」Stingが曲を書いたミュージカル、The Last Shipが1月までニューヨークのブロードウェイで上演されていたのだ。この人たちは、ニューヨークまでそれを見に行っただろう。ポールの女性への優しさ（笑）が感じられるエピソードだった。

（StingのThe Last ShipもPaulのThe Capeman同様、音楽性や内容は評価されながらも、客入りが悪く、短期間の上演になってしまった。二人はこんなところにも共通点があるのだ…）

こうして二日間、濃厚なコンサートを満喫した。音楽性が非常に高く、あらゆる意味で完璧に近いライブだと思う。ネットでは、このライブを公式映像化してほしいという希望もあがっているようだが、当然のことだろう。ただ、一点、前年末に東京でArt Garfunkelの公演を聴いたものとしては、最後にちらっと思った感想が「やっぱりアーティーの声も聴きたいな」であったことを付け加えておく。S&Gとしてのライブパフォーマンスが今後あるのか、わからないが、できれば、もう一度、生で聞いてみたいものである。（終）

注) 写真は全て私が撮影したものです。ライブ写真は冒頭のものを除いて、アントワープ公演のものであります。

Paul Simon Band

Mark Stewart: guitars, saxophone, wind instruments, vocals

Bakithi Kumalo: bass, percussion, vocals

Vincent Nguini: guitars, vocals

Jammy Haddad: percussion

Jim Oblon: drums, guitars, vocals

Mick Rossi: piano, Hammond organ, harmonium, percussion, celesta

Andy Snitzer: saxophone, synthesizer, flute

C. J. Camerieri: trumpet, French horn

Bruce “Sunpie” Barnes: accordion, harmonica, vocals

Sting Band

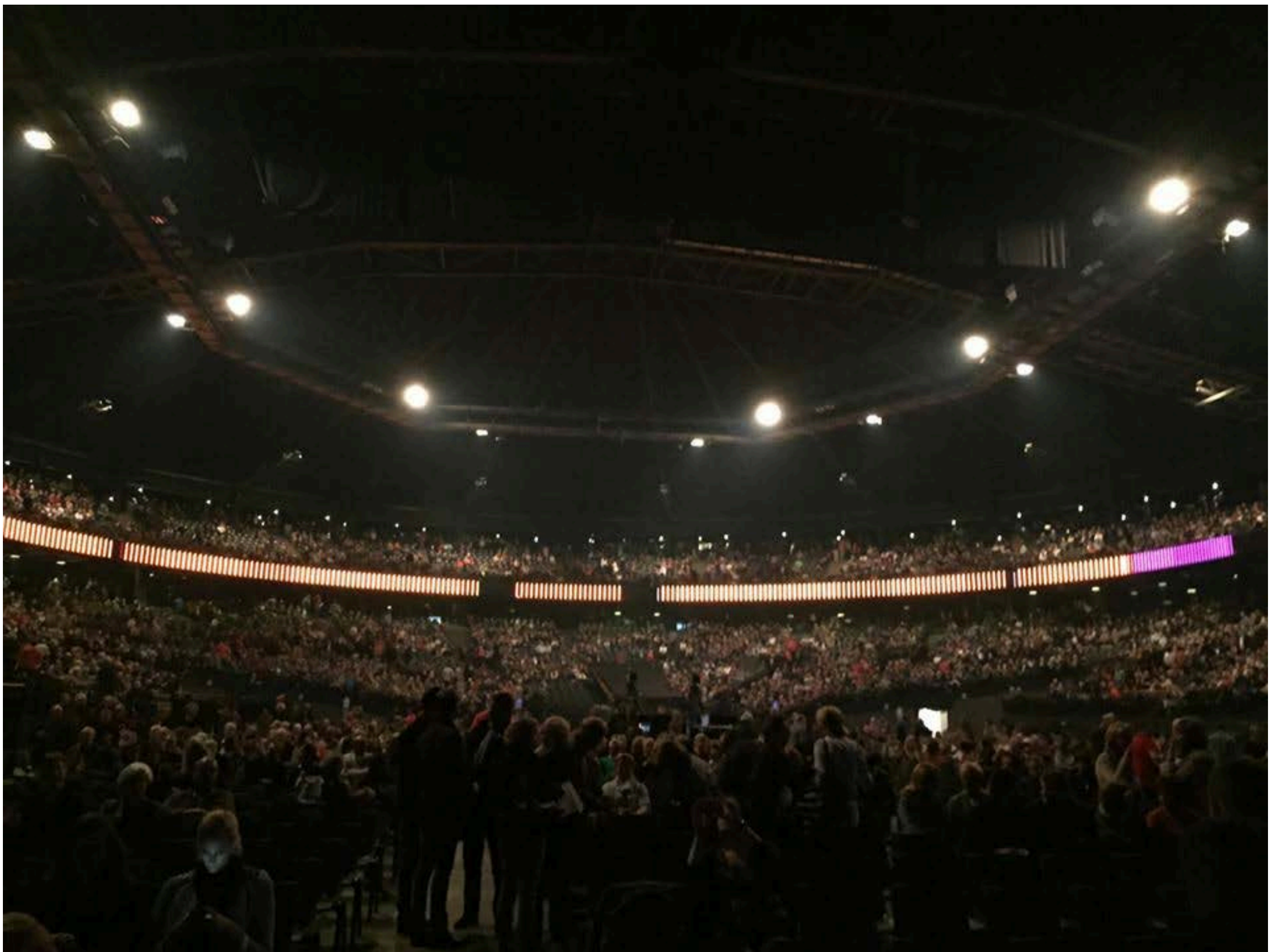
Dominic Miller: Guitar

Vinnie Colaiuta: Drums

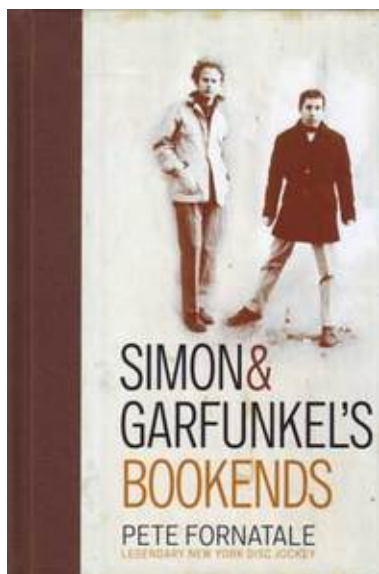
David Sancious: Keyboard

Peter Tickell: Electric Fiddle

Jo Lawry: Vocals



フォークロックの時代



SIMON&GARFUNKEL'S BOOKENDS PETE FORNATALE
4 FORK ROCK冒頭部分の試訳

訳：ようこ

『サウンド・オブ・サイレンス』はアーティの話通りに1964年2月19日に自動で書き上げられたのかもしれないが、アメリカにちょうど10日前に響き渡ったサウンドは沈黙とは程遠かった。1964年2月9日、日曜の夜にエド・サリバン・ショーに出演したザ・ビートルズのサウンドだった。これまでアメリカで放映されたテレビ番組屈指の高視聴率番組の一つであり、ここへの一度の出演で水門を開けられた新しい種類のミュージックはまもなく世間を席卷するのだった。しかしいわゆるブリティッシュ・インヴェイジョンは本当にオリジナルのミュージックについてのものではなかった。アメリカのロックンロールを取込み、吸収し、改革して新しくユニーク、オリジナルな形にして大西洋越しに我々に投げ返してきたものだった。

その年に頭角を現したグループザ・ビートルズ、ザ・ローリング・ストーンズ、ザ・キンクス、ヤードバーズ、デイヴ・クラーク・ファイヴなどをどれでもみれば、それが真実とわかることだろう。ザ・ビートルズ以外では、1964年に1位を取ったイギリスのグループは3つだけだった。レノン&マッカートニーの作品『愛なき世界』を歌ったピーター&ゴードン、アメリカのソングライター、ジェフ・バリーとエリー・グリニッチによる『ドウ・ウォー・デイデイ』を歌ったマンフレッド・マン、アメリカのトラディショナル曲の『朝日のあたる家』（そのアレンジはボブ・ディランのデビューアルバムのものによっていた。同様にディランは若い頃の彼の導師の一人であるデイヴ・ヴァン・ロンクのアレンジを使った）を歌ったエリック・バードン&ジ・アニマルズである。

アニマルズが電子楽器を使い、アメリカのチャートの1位に押し上げたこの曲が翌年フォークロックとして知られるものの初期の一例だった。この『朝日のあたる家』の斬新なバージョンは『水曜の朝、午前3時』のプロデューサーであるトム・ウィルソンの関心を逃れることはなかった。実際に、彼はディランのバージョンに電子楽器を使うことを試みたのだが、その企てを断念し、結果はリリースしなかったのだ。しかし頭のまわるウィルソン氏は早期にこの概念を念頭に置いていて、再び試すことをためらいはしなかった。（1年後に機会が巡ってきた）

フォークはブリティッシュ・インヴェイジョンの猛攻が始まった後でもアメリカのチャートで健闘し続けていた。1964年にトップ10入りしたフォークはセレンディピティ・シンガーズの『雨を降らせないで』、ゲール・ガーネットの『太陽に歌って』、イギリスのデュオ、チャド&ジェレミーの『サマー・ソング』もあった。しかし『水曜の朝、午前3時』は跡も残さず沈んでしまった。失敗にがっかりしながらも、レコードビジネスの予測不可能には慣れていたため、サイモン&ガーファンクルは肩をすくめて運命を受け入れた。ポールはイングランドに戻り、アートは大学に戻った。そして物語はまさにそこで終わってもおかしくなかった—しかしそうはならなかった。

1965年の始まりは新しいサウンド、趣向—すなわちフォークロックをもたらした。

『フォークロック』は60年代半ばに、大変大規模に起きたトラディショナルフォークミュージックとアメリカのロックンロールの融合を表すために用いられたとてもシンプルで正確な用語である。ロックはフォークの歌詞の深さ、音楽のテクスチャー、感情に訴えかける激しさが気に入り、フォークはロックの（文字通りにも、比喩的にも）電撃的なところや、興奮と楽しみの感覚、待ち構える大観衆に直接アクセスすることを好んだ。実際、フォークロックは、それぞれの形式のみでは得られない規模の観衆に、力強い宣言や意味深いメッセージを届ける手段を提供したのである。

何が結びつけたのだろうか。効果的な連続パンチが起きたのだ。ボブ・ディランのロック・アンド・ロール・スターとしての再改変と、バーズ（Byrds）という名の5人組の登場。メンバーたちは初期のPRキャンペーンで、アメリカのビートルズへの回答と表現された。1965年には他にもフォークロックのヒットメーカーが存在した。タートルズ(The Turtles)、ソニー&シェール(Sonny and Cher)、ラヴィン・スプーンフル(The Lovin' Spoonful)などである。しかしなんといってもディランのバーズへの影響、逆にバーズからディランへの影響こそがすべての動きを浸透させたのだ。

ディランはこの新しい融合の原動力だった。1965年に(どちらもトム・ウィルソンプロデュース)2枚のアルバム、3月に『ブリンギング・イット・オール・バック・ホーム』(Bringing It All Back Home)、8月に『追憶のハイウェイ61』(Highway 61 Revisited)をリリースした。前者はこの形式でのディランの実験作として録音された『ホームシック・ブルース』(Subterranean Homesick Blues)を含み、後者は全力でのエレクトリック・フォークロックの作品だった。これらのレコードが達成した偉業を正当に評価するため、筆者はこう繰り返す。1965年のたったの5ヶ月間に、ボブ・ディランは最も成功し、革新的で、影響力があり、多層的で、陰影があり、冒険的で、ロックンロールはもちろん他のどんな音楽史にも残るLPレコードのうちの2枚をリリースしたのだ。すごい！





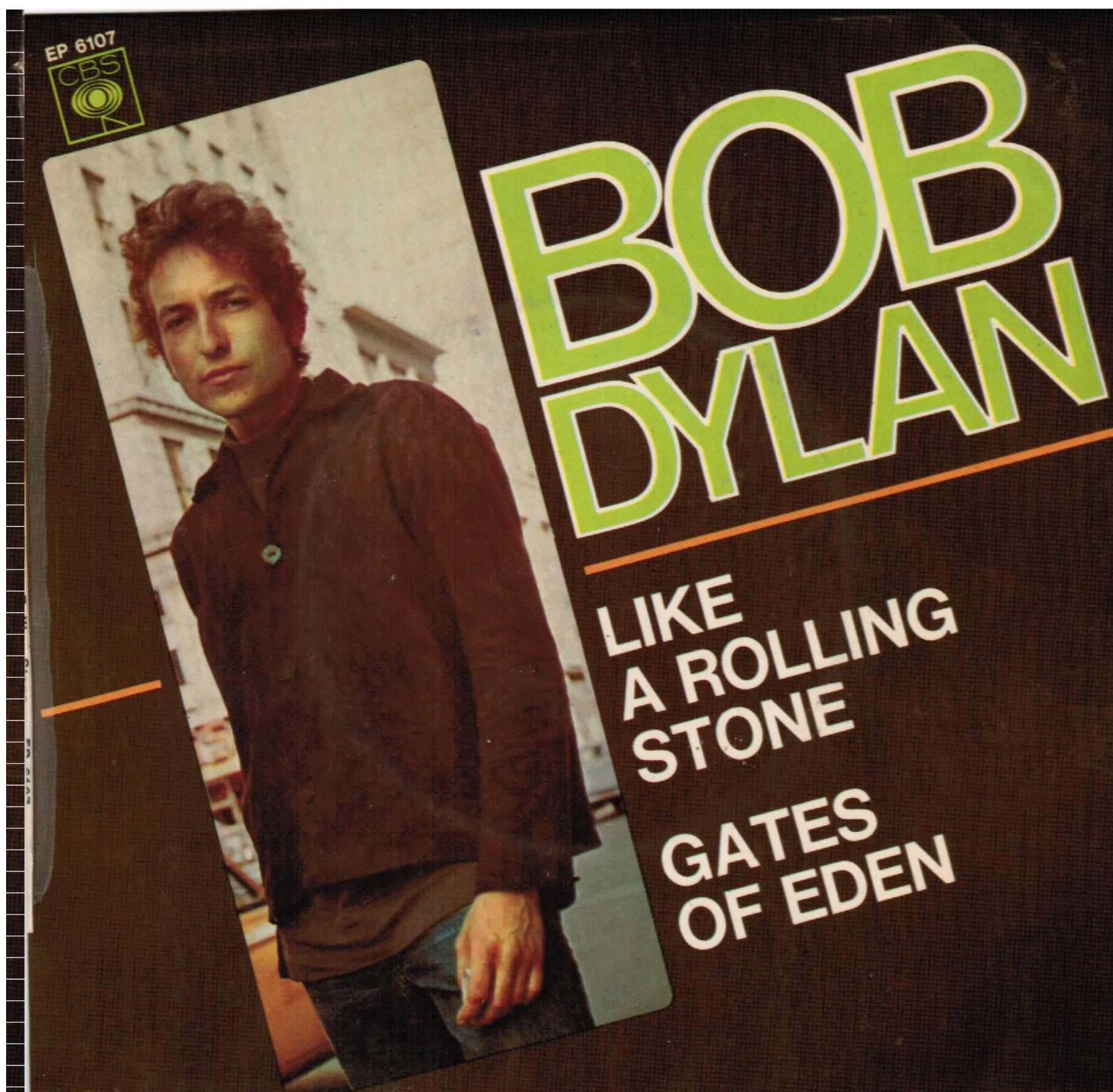
前者はディランが、それまでの4枚のアルバムで巧みに進んできたアコースティックの世界に片足を残しての過渡的なアルバムだった。(アルバムを『ブリンギング・イット・オール・バック・ホーム』というタイトルにしたのは、ディランがティーンエイジャーの頃崇めていた、大好きなロックンロールへの帰還を知らせるためだったのか?) 後者は彼にとって初の徹底的な、全力を挙げてのロックンロールアルバムで、20世紀最重要のレコーディングであると近年評されたシングル、『ライク・ア・ローリング・ストーン』で幕を開けた。そしてそれら自体が杭打ち機のようにパワフルな『やせっぽちのバラッド(Ballad of a Thin Man)』、タイトル曲、『親指トムのブルースのように(Just Like Tom Thumb's Blues)』が後に続くのだ。演奏時間が全6分の『ライク・ア・ローリング・ストーン』が65年の夏の終わりにアメリカのポップチャートの2位となるや、そこら中のパフォーマーたちが既に膨大なものとなっているディランの楽曲の中からロックンロールのヒットとできるような曲を探し始めた。しかしそれも既に起こっていたのだ。

元はジェットセット(the Jet Set)、次にビーフィーターズ(the Beefeaters)、最後にバーズ(the Byrds)となったグループが1965年に出したシングルによって、フォークロックは突如大衆の認知を得た。ジーン・クラーク、マイケル・クラーク、デヴィッド・クロスビー、クリス・ヒルマン、ジム・マッギン(のちにロジャーと改名した)のそれぞれが、グループにユニークなものをもたらした。彼らの音楽的な資質はしっかりとしたものだ。彼らはさらに1960年代の若いレコード購入者層、特に女性にアピールする3つの特性を持っていた。素晴らしいルックス、素敵な巻き毛、そして最高の即興演奏! フォーク専門のエレクトラを含む数レーベルでの誤ったスタートの後、バーズはコロムビアと契約し、テリー・メルチャー(大人気映画スター、ドリス・デイの息子)という名のスタッフ・プロデューサーを充てられた。

マッギンはフォークミュージックには明るかったが、ビートルズに率いられる新しいタイプのイギリスのロックグループのパワフルな魅力も理解していた。1964年夏の夕べに、ジョージ・ハリソンが『ハード・デイズ・ナイト』でリッケンバッカーの12弦エレキギターを引くのを目にしてから、マッギンはその楽器を自らの恐るべき保有武器に追加した。

このパズルの完成に必要な最後のピースは、シングルとして出せる強い楽曲だった。折よく、マネージャーであり、ボブ・ディランの側近の数人と近いジム・ディクソンが、『ブリンギング・イット・オール・バック・ホーム』に収録予定だった曲、『ミスター・タンブリン・マン』の初期デモを入手した。長い、写象主義的なアコースティックソングであり、ランブリング・ジャック・エリオットの少々調子外れのハーモニーの入ったディランのアレンジではほぼヒットシングルとなる見込みはなかった。

当初はいささか不承不承ながら、マッギンはその曲を全く作り変える2、3のアイデアを思いついた。扱いやすいものにし、『シングル・サイズ(この場合は2:10)』に収まるように数バースを削り、自身の12弦エレキギターで演奏した素晴らしいインストのイントロを追加した。これまでレコードに録音された重要なグループの登場の中でも、もっともユニークな声明の一つとして今日まで残っているイントロである。1965年6月、『ミスター・タンブリン・マン』は瞬く間にアメリカン・チャートの1位に駆け上がり、フォークロックは即座に『新現象』の地位を獲得した。7月にはディランがニューポート・フォークフェスティバルで『プラグイン』し、夏の終わりまでには『ライク・ア・ローリング・ストーン』がトップ10に飛び込んだ。さらなるフォークロックのヒット曲を求めて狂ったような奪い合いが起こっていた。





トム・ウィルソンはコロムビア・レコードでこれらの出来事の全てを目にし、自身が1964年にプロデュースしたサイモン&ガーファングルのアルバムの中の一曲が国内の数か所の市場、とりわけボストンとフロリダで大きな関心を集めたことを思い出した。ポール、アートに知らせることなく、彼はアルバムのオリジナルトラックに戻り、(その前の年にディランの『朝日のあたる家』でしたように) 『サウンド・オブ・サイレンス』に12弦ギター、ドラム、エレクトリックバスのトラックを追加して新しいバージョンをシングルとして出した。これは見かけほど突飛な話ではない。ロックの殿堂入りをしたディオーン・デムーチが、彼とニューヨークの優れたスタジオミュージシャン数名がウィルソンの依頼で、ディランの『マギーズ・ファーム』のソロの初期アコースティック版デモに同じことをしたことがあると私に語ったことがある。ディオーンは、その後リリースされたアルバムバージョンは、その日に録音された、彼と電子楽器のリズムセクションをそのまま流用したのだと断言した。フレッド・ブロンソン氏は、その著作『ビルボードNo.1ヒット』でこう主張している。6月半ばに行われたディランの『ライク・ア・ローリング・ストーン』の伝説的なセッションのあと、ウィルソンは数名のミュージシャンに、残って別のもう1曲をやってくれるように頼んだ。その曲とは、もちろん、『サウンド・オブ・サイレンス』であった。最初にエレクトリックミックスを聞いたときについてアーティはこう語った。「(コロムビアが)僕に聞かせたのは、1965年9月で、ちょうどイギリスから帰国して大学に戻ろうとしていたときだった。ポールはイギリスに残っていた。(コロムビアは)フォーク・アルバムの『水曜の朝、午前3時』から『サウンド・オブ・サイレンス』を取り出して、12弦エレキギター、ドラム、ベースを追加し、バースが『ターン・ターン・ターン』に使ったようなフォークロックのサウンド、甲高くて弦鳴りがして、それでも当時の素敵なロックンロールのリズムスタイルだった。「面白い、何か起きるかも、売れるかもしれない」って思った。でも当時は全然ヒットしないことに慣れていたので、実際は何も期待しなかった」

1965年の秋には、その曲はアメリカのチャートを上りつつあり、アート・ガーファングルはヨーロッパにいるポール・サイモンを見つけ出し、アメリカに戻るようにせき立てるという幸せな任務を負った。なぜならついにこのデュオは待ちわびていた本物のトップ40ヒットを出したのだから！『サウンド・オブ・サイレンス』蘇生の「お助け妖精」の役を果たしてすぐ後、トム・ウィルソンはコロムビアを去り、MGM/Verveレコードでもっと実入りのいい地位に就いた。そこでもフランク・ザッパ、マザー・オブ・インベンション、ブルース・プロジェクト、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドなどの才能発見の驚くべき連続記録を伸ばしていった。別のコロムビア社員のボブ・ジョンストンがアートとポールのプロデューサーを引き継いだ。



以前にも「偶然の」ヒットはあった。例えばDJがシングル盤をひっくり返して、A面よりB面をヒットさせたり(ジーン・ヴィンセントの『ビー・バップ・ア・ルーラ』はB面だったが、A面の『ウーマン・ラヴ』ではなくこちらがヒットした)、ヒットしなかったシングルが公共広告に使われた結果、チャートに予想外に劇的な復活を遂げたりすることもある(ヤングブラッズの『ゲット・トゥギャザー』)。中でも『サウンド・オブ・サイレンス』の物語は別格である。その起こりそうもないヒットの手段に加えて、集団でも個人でも、我らが都市の吟遊詩人の二人のドラマティックで長く続くキャリアの始まりを記録したものだっただけだ。

この大変聡明で、多才で、強い集中力と決意を持った将来ロック殿堂入りする二人についての話の締めくくりはまた驚異的だ。もちろん、ポールはアーティのアドバイスを聞き入れ、すぐに『サウンド・オブ・サイレンス』の思いもよらない成功の最中の合衆国に戻った。筆者のラジオ番組Mixed Bag出演時のポール・サイモン本人の言葉による話がこれだ。「そう、僕がイギリスから帰国したときは、レコードは、えーっと、8位だった。このオーバーダビングしたレコードには僕はほとんど関わっていなかった。滞在先がなかったんで、クイーンズの両親の家に戻っていたんだ。アーティもクイーンズで暮らしてた。ある晩、僕の車でアーティと出かけて、角に駐車して煙草を吸っていた。確か70号線と141番通のところだったと思う。ラジオで『サウンド・オブ・サイレンス』がかかって、ディスク・ジョッキーがこう言った。「第1位、サイモン&ガーファンクル！」 そしたらアーティがこっちを向いてこう言ったんだ。「こいつらはきっと、とびきり楽しく過ごしてる真っ最中に違くないね！」

もう何年もの間、自分たちがNo.1 シングルを出したことを自分とアートがどんな風に発見したかについて、ポールはこの物語を話してきた。しかしアーティが、明らかに冗談だよという口調でこういったとき、この二人の『兄弟間の』競争意識の明るい面がはっきりとわかった。「何であれポールが話したことは本当にあった話であると僕は確信しているし、他の説を挙げようなんて試みすらしていないよ」さらに大笑いしてから、もちろん彼は自分たちがその曲が1位となったのをどういう風に知ったのか、全く違うバージョンの話をした。「よく覚えているけど、こんな気持ちになったんだ。アメリカには今、僕たちより人気のある歌を歌っている人はいないんだってね。とても楽しかった。5位から1位に動いたのは、1965年12月の何日かだったと思う。僕たちはLAにいた。マネージャーが僕たちの泊まっているホテルに電話してきた。同じ部屋に泊まっていたんだ。当時は僕たちは同じ部屋でごろ寝しなきゃいけないってね。僕が電話を取った。マネージャーが「おめでとう、来週のビルボード誌で、君たちは5位から1位になるぞ」と言った。楽しかった。カーテンを開けて、この真っ赤な部屋に明るい日光を入れた。そしてルームサービスを頼んだ。素晴らしかったね」

ポールは彼バージョンの話を、「残りは、ご存じのとおり……退屈な話だよ！」と締めくくることがお気に入りだ。しかし本当のところ、残りは退屈とは程遠い。挑戦すらしなかったのに、サイモン&ガーファンクルは、他の重要人物(ディラン、ビートルズ、マッギンその他)全てと肩を並べて60年代のロック革命の主導的役割を手渡されたのだ。近年、音楽史家にはフォークロックの重要性を矮小化しようとする者がいる。しかし筆者を含めた多くの者にとって、フォークロックはこの『反体制的音楽』の成熟における大変重要な要素である。ポールはこの意見に同意している。「フォークロックはちょっとした袋小路なんだ。60年代の音楽と見なさなければいけないと思う。ビートルズやストーンズのことを考えてみて。彼らもフォークロックの影響を受けていた。フォークロックができて初めて、ロックンロールが生活について、白人の中流階級の生活について、街の人々の暮らしについて俎上に乗せたんだ。ビートルズはカメラの前で煙草を吸った初めてのグループだ。当時のエルヴィス・プレスリーは生活を全て隠していたことを考えてくれ。ピュアなイメージを保たなきゃいけなかった。ビートルズとストーンズは不良少年のようだった。フォークロックは歌詞がリアルでありうる、言語を豊かにできる、詩的言語にも迫りうるという概念を見せたんだ」

1986年に筆者のラジオ番組に出演した時、初期のロックンロールが、単純なティーンエイジ向けというレッテルから脱出し、成長する必要がいかにかについてポールは熱心に語った。またこのいわゆる『子供の音楽』がよりシリアスで、音楽表現として成熟した形式となるのにフォークロックが大きな役割を果たしたということを確認していた。「子供の頃から、そしてその後の段階をずっと見てきた僕の知る限りでは、ロックンロールは音楽の言語として基礎となるものとなった。始めるにあたって完璧なボキャブラリーだと思うんだ。いつだってロックンロールに戻れば核心となるものが見つかる。なぜなら僕たちは皆、無防備で利用されやすい時期にそれを聞いていたからだ。心が無抵抗に開かれて。後に続く世代全てにとってもその通りなんだ。なぜならロックンロールはいつだって傍にあったし、思春期に皆触れて、その変化、ビートが影響を与えるって気づくんだ。でも音楽が思春期の段階だけに留まるなら、年齢を重ねつつある者と既に年をとったものはお互いに話す手段を失ってしまう。僕には息子がいるけど、彼はロックンロールを聞く。僕も聞く。現に話し合う話題があって、たぶん話しあえるメインの話題なんだ。

彼はこう続ける。「ロックンロールの前の世代は全然違っていた。ロックンロール以降は、なにが作用しているかに関わらず、何かがどこかでいつか、結果を生むことを期待できることになった。それが(『サウンド・オブ・サイレンス』)で起きたことなんだ。

ここで出てくる疑問は、いわゆる『才能は自ずから現れる』ののだろうか？ということだと思う。必ずしもそうではない。トップをとったパフォーミングアーティスト一人につき、数え切れないほどの、才能があるけれどその地位を得られなかったり、ハリー・チェイピンのミスター・タナーの歌のように、オハイオ州デイトンの閉店後のクリーニング店で自分に対してだけ歌うようになってしまった者たちがいるのだ。なにが違いを生んだのだろうか。天与の才能がある、しかし結局のところ、断固たる決意、素晴らしいタイミング、そして何よりも重要なのはおそらく、圧倒的な幸運なのかもしれない。次の素晴らしいスーパースターの誕生のためには、恒星と惑星は決まった星辰を作らなければならないのだ。そしてそれがまさしく1965年の後半にサイモン&ガーファンクルに起きたことなのだ。しかしそれは始まりに過ぎなかった。

『サウンド・オブ・サイレンス』は1965年のアメリカのチャートにフォークロックが保持していた流行の地位につけこんだ単なる一発屋となってもおかしくなかった。これまで他にも同じような

ことがあった。ウィー・ファイブというグループの『ユー・ワー・オン・マイ・マインド』は、シルヴィア・フリッカーのフォークソングのフォークロックカバーだった。また、ボブ・リンダの『エルーシブ・バタフライ』のように。また、フォークロックを跳躍台として用い、すぐにより商業的なポップロックへと移って行ったグループもあった。こちらにはタートルズが含まれる。ボブ・ディランの『イット・エイント・ミー・ベイブ』のカバーで有名になったが、さらなる成功を収めたのは、1967年にナンバー1シングルとなった『ハッピー・トゥギャザー』のようなもっと軽い感じのポップチューンでだった。ソニー&シニールもそのリストに入っていた。『アイ・ガット・ユー・ベイブ』は1965年の特徴的なフォークロックのヒット曲で、このデュオはディランの『オール・アイ・リアリー・ウォント・ドゥ』をシニールがカバーしたり、ソニー・ボノの個人的なプロテスト宣言曲である『ラフ・アット・ミー』などでこの路線を追求し続けた。

サイモン&ガーファンクルは幸運によって遠回りでレコードビジネスに復帰したのかもしれないが、いったんチャンスを手にしたら、それを最大限に活用した。アートは他の人と同様に、自分たちの改変されたフォークソングがそのようなビッグヒットになったことに驚いていたが、それに対処できることは明らかだった。「その時に1年半経っていたというのはおかしいことだ。当時はデュオの形のグループはほぼ存在していなかった。だから僕たちは、「さあ、今では僕たち(デュオ)がいるぞ、やろう、次のヒットを出そう！」って言ったんだ。

後知恵視点で、入れ替わりの激しいポップミュージックビジネスを観察するのは楽しい。基本的には、スターは3つのカテゴリーに分けられる。ダッシュヤー、スプリンター、長距離走者。ダッシュヤーとは奇跡的な1, 2曲のヒットをとばし、長い間居残りはしないが、オールディーズ界限で何度も再浮上することができるのだ(もし同じ曲を何度も何度も何度も何度も歌うことでおかしくならなければだが)。スプリンターはある一定期間ヒットを続けて出すが、その井戸は枯れてしまう。そのグループがどんな形にしろ一緒にいることに決めたなら、そのヒット曲の賞味期限が切れてもずっと、ツアーでますますの暮らしができるのだ。3番目のグループは一番興味深い。長距離走者の作品群は大変影響力があり力強いいため、時を超越し、ついには不死性まで備えてしまう。ビジネス、芸術両面においてミュージックビジネスのキーマンとなる。中でも最重要の者たちは、後に続くものへの基準を作り、文化に影響を与え続ける。彼らがパフォーマンスをしないと決めたずっと後までも、そして時には、彼らの死後までも。サイモン&ガーファンクルは長距離走者である。



『サウンド・オブ・サイレンス』はサイモン&ガーファングルの長距離走のスタートラインだった。当時は、突然ヒットシングルを出した後のゴールは主に2つ、・できる限り早く次のヒット曲を出す。・ヒットの成功を金に換えるために、できるだけ早くアルバムを出す。アルバム『サウンド・オブ・サイレンス』はだいたい3週間でレコーディングされ、1966年1月17日、コロムビアよりリリースされた。

サイモン&ガーファングルは幸運によって遠回りでレコードビジネスに復帰したのかもしれないが、いったんチャンスを手にしたら、それを最大限に活用した。アートは他の人と同様に、自分たちの改変されたフォークソングがそのようなビッグヒットになったことに驚いていたが、それに対処できることは明らかだった。「その時に1年半経っていたというのはおかしなことだ。当時はデュオの形のグループはほぼ存在していなかった。だから僕たちは、「さあ、今では僕たち(デュオ)がいるぞ、やろう、次のヒットを出そう！」って言ったんだ。

後知恵視点で、入れ替わりの激しいポップミュージックビジネスを観察するのは楽しい。基本的には、スターは3つのカテゴリーに分けられる。ダッシュヤー、スプリンター、長距離走者。ダッシュヤーとは奇跡的な1, 2曲のヒットをとばし、長い間居残りはしないが、オールディーズ境界で何度も再浮上することができるのだ(もし同じ曲を何度も何度も何度も何度も歌うことでおかしくならなければだが)。スプリンターはある一定期間ヒットを続けて出すが、その井戸は枯れてしまう。そのグループがどんな形にしる一緒にいることに決めたなら、そのヒット曲の賞味期限が切れてもずっと、ツアーでまずまずの暮らしができるのだ。3番目のグループが一番興味深い。長距離走者の作品群は大変影響力があり力強いいため、時を超越し、ついには不死性まで備えてしまう。ビジネス、芸術両面においてミュージックビジネスのキーマンとなる。中でも最重要の者たちは、後に続くものへの基準を作り、文化に影響を与え続ける。彼らがパフォーマンスをしないと決めたずっと後までも、そして時には、彼らの死後までも。サイモン&ガーファングルは長距離走者である。

『サウンド・オブ・サイレンス』はサイモン&ガーファングルの長距離走のスタートラインだった。当時は、突然ヒットシングルを出した後のゴールは主に2つ、・できる限り早く次のヒット曲を出す。・ヒットの成功を金に換えるために、できるだけ早くアルバムを出す。アルバム『サウンド・オブ・サイレンス』はだいたい3週間でレコーディングされ、1966年1月17日、コロムビアよりリリースされた。





※GACHA先生のマンガは巻末から始まります。



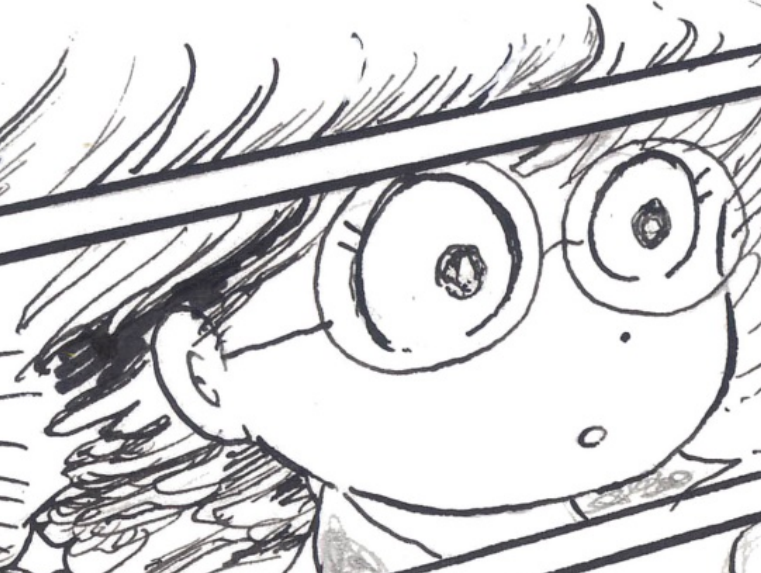
パツと

では郵便局にと
先導する夫の後ろを
重々しい気持ちで
歩いていると...



先へ行ってわからない

アーティの
写真が視界の一部に
飛びこんできました



美化GACHA

何？

え？

郵便局...



本物？

何これ？

アーティの
レコード！！



買ったら...?

キラリ...



感動！！

単純GACHA

テンションマックス



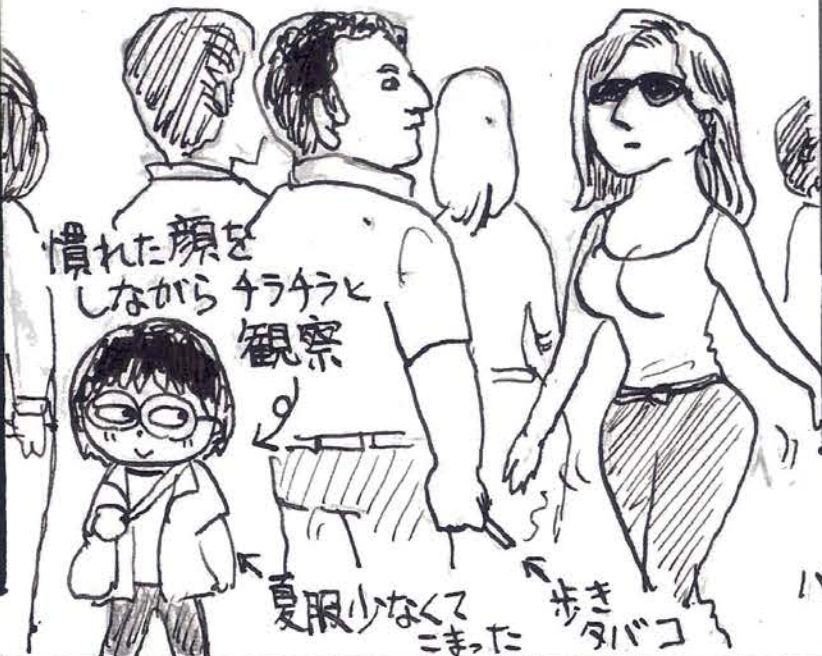
ま待って
待って

うわー
本物！！
アーティの
レコード

目撃者GACHA

さて
冬のサンパウロは
乾期とはいえ、
3週間雨が無く
夜中こそは13~14度ですが
日中は28~29度になり
皆さん夏服装でした。

ランチタイム、おビキビと歩く



ただし、これは平年より
暑かったらしく、(暖冬?)
最後の数日間、19度
以下になりました。

パウリスタ大通りはビジネス街
リオとはずいぶんちがう雰囲気

慣れた顔を
しながら
チラチラと
観察
夏服少なくて
また
歩きタバコ

空はどんより
風は冷え冷え

残り数日となった
ある肌寒い日

待っても来ない夫
待っても
終わらないうち

場所
まちがえた
かな?

川うろ

夫の会社も
歩いては分弱。
ほぼ毎日、時半に
待ちあわせてランチ
していました。

好きなものを
お皿に乗せて
はかりまじり

めづらしくて、つい盛

ラインは圏外。
電話は通じない

でもへたに動くと
かえって夫が私を
探しまわって
大ごとになるかも。

迷子心得の鉄則
動かない。

でもおなかすいた
肌寒い
ちぎとこわい
郵便局に早く
行きたい

ももん

日本にハガキを初めて出す予定だった
外ではお利スマホを出さないよう言われている

早く送りたい。

私は郵便局に
行きたい。

先にランチ
行ニか
動かずに
いそぐれて
よかった

おこるとセカセカ歩く GACHA

お仕事なのだから。
大事な会議と
わかってる。
(私を)忘れたのでは
ないこともわかってる

でも頭に
くる狭量主婦
むかむかむか

35分後に夫が現われ

ごめんごめん
会議が長引いて

忘れてた

カチン

ロビーで
待ってればよかったのに

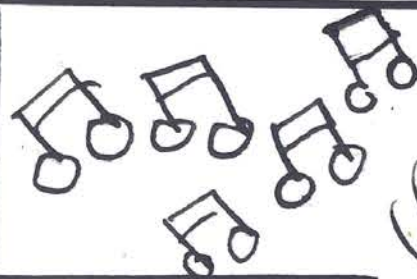
コンドル
コンドル

そして出ました。
コンドルは
飛んで行く
フォルクローレ版

とこうより
ショーなので
のりのよ
エンターテナー
フォルクローレ



昔は男のように
踊りながら歩く



暗くて
どうなっているのか
いまいち不明

でも
それだけでは
もろいかな

え...

ついに
怪人コンドル?
白い羽根の袖を
バッサバッサして
登場!



うん...
コンドル?



日系
ブラジルの先生
日本語がわかる。

EL
CONDOR
PASA...?
(発音できと)

シウハス
カリアのショーで

後日、夫に
通わされていた
ポルトガル語の
先生に
話したら...

コンドル?

プロフェッサー
ソニヤ
マキヤマ

もったいなくも マンツーマンレッスン

じつにパワフルで
すごいのです



シン
Sim
(はい)

何とBOTWの
タイトルを書いて
ちやっとロザリオで
くれました。
そうです...
人気なんですか?



わお!
私はファンです

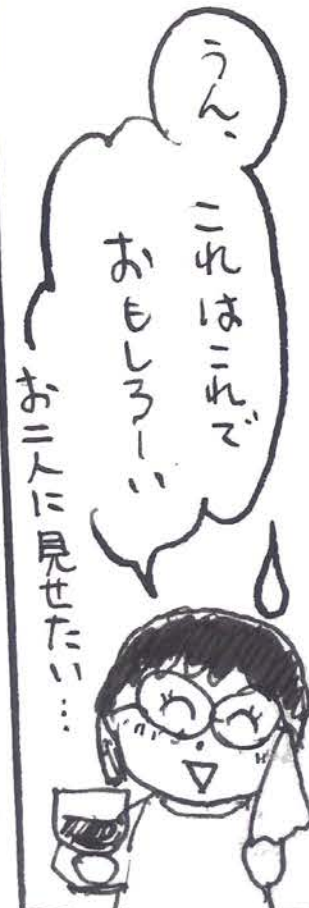
白板に

CONDOR と

SHIZO & UTARU DZEMEN
書いてくれたので

全部日本語

(何に行っているんだか)



うん、これはこれぞ
おもしろい...

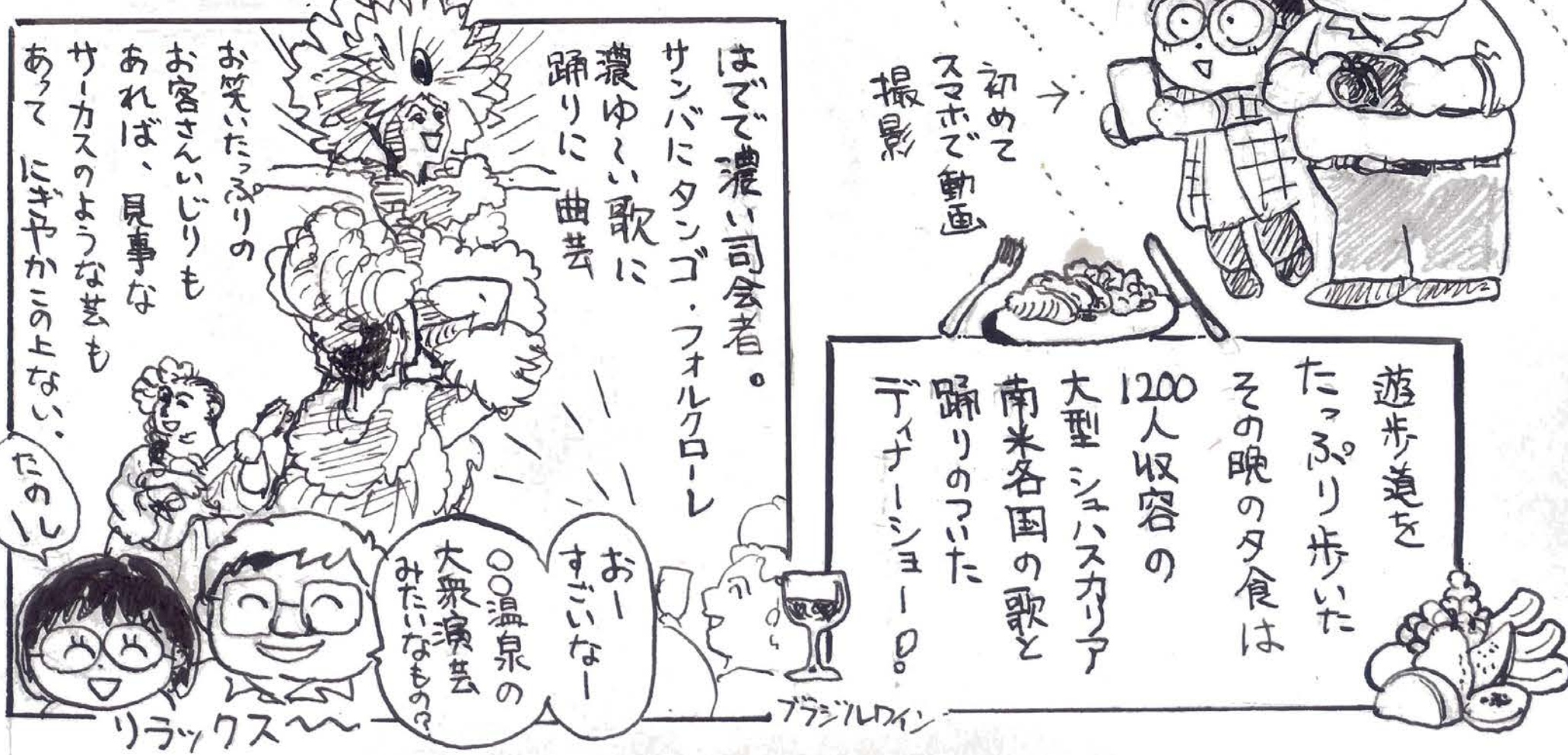
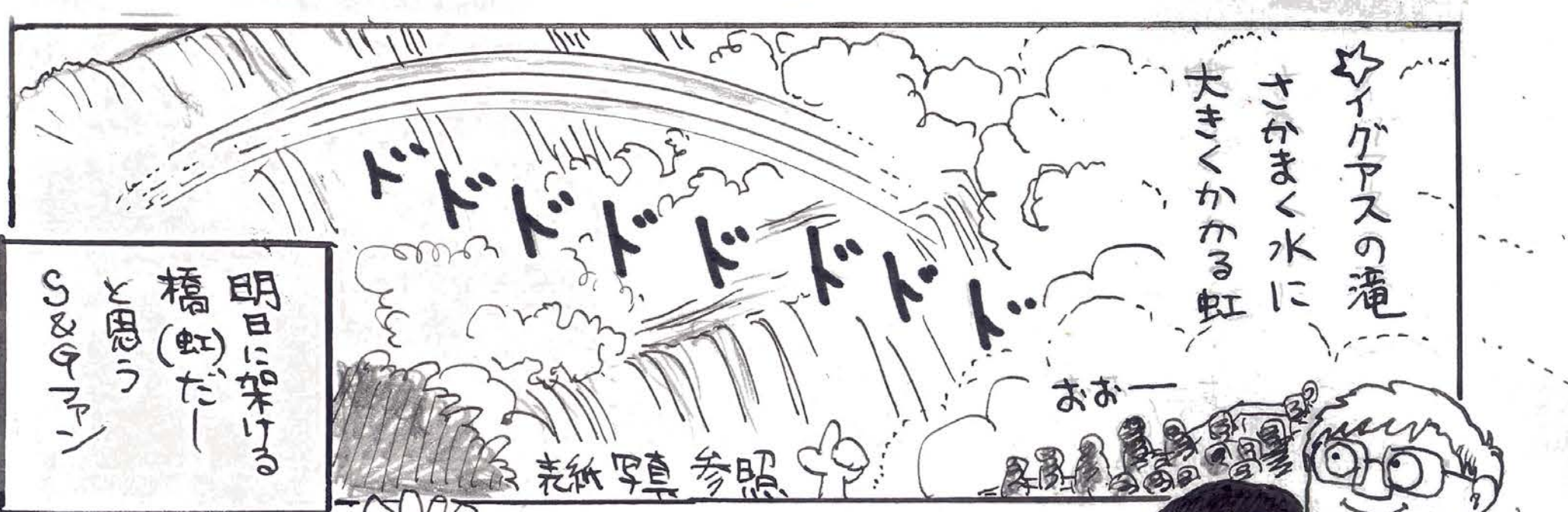
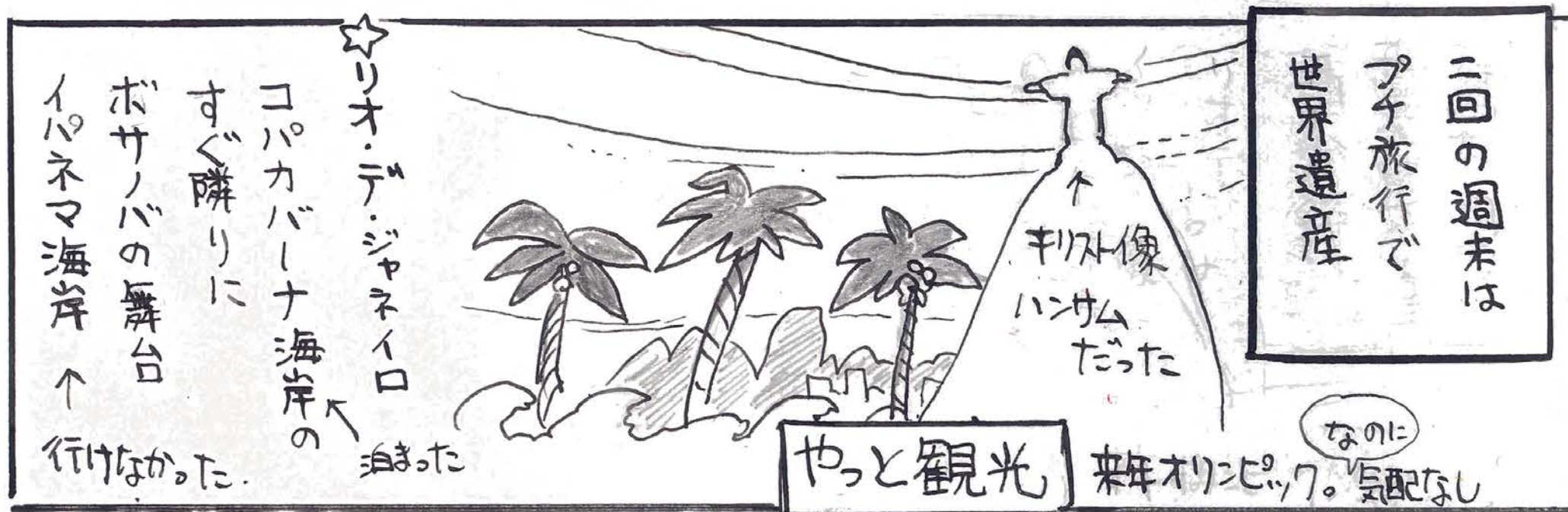
お二に見せたい...



お年寄りが
タビですね

言葉を書き
添えるほど
には

日本語が
うまくな先生
でした。



2014年夏のオフ会で

夫の転勤で
ブラジルに
行きます。

妻は
ごめん。

と宣言し



皆様から
ブラジル情報
いろいろ
いただいたのに

その節は
ありがとうございます

ビールの
注文は



ボサバは

オフ会の
わずか一週間後に
無期限延期決定

おひさし



おかげで(?)
12月4日(木)名古屋
5日(金)尼崎の
アーティコンサートに
行くことが
できました。

アート・ガーファンクル
魅惑の宵コンサート



日本ニ
マタ来レ
ウレシイデス

アーティ♡
日本によろこび!!

スミセン
服装忘れた

名古屋では大口さん
ハイジさんと出待ち
体験も!



シンプルな構成で
アーティの世界がひびきます
生歌の素晴らしさ
アーティの聴かせる歌に
酔いしました

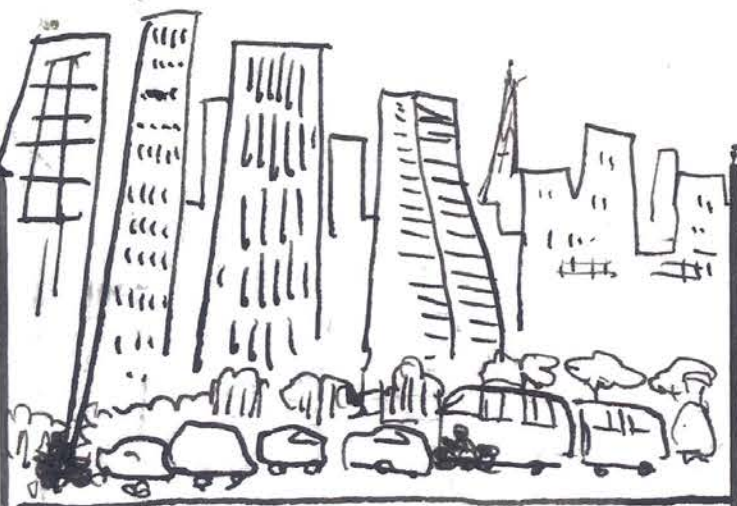
ボサバの父、アントニオ・カルロス・ジョビンの「静かな夜」もありました

結局2015年春から
夫は一人でブラジルへ

妻GACHAは
諸事情により
日本に残り、

ブラジルに行ったなら
ボサバによく
言っておくれ
かつアーティも
歌ったボサバ...

という想いも
3週間だけでは
生活するのが
やっこの私



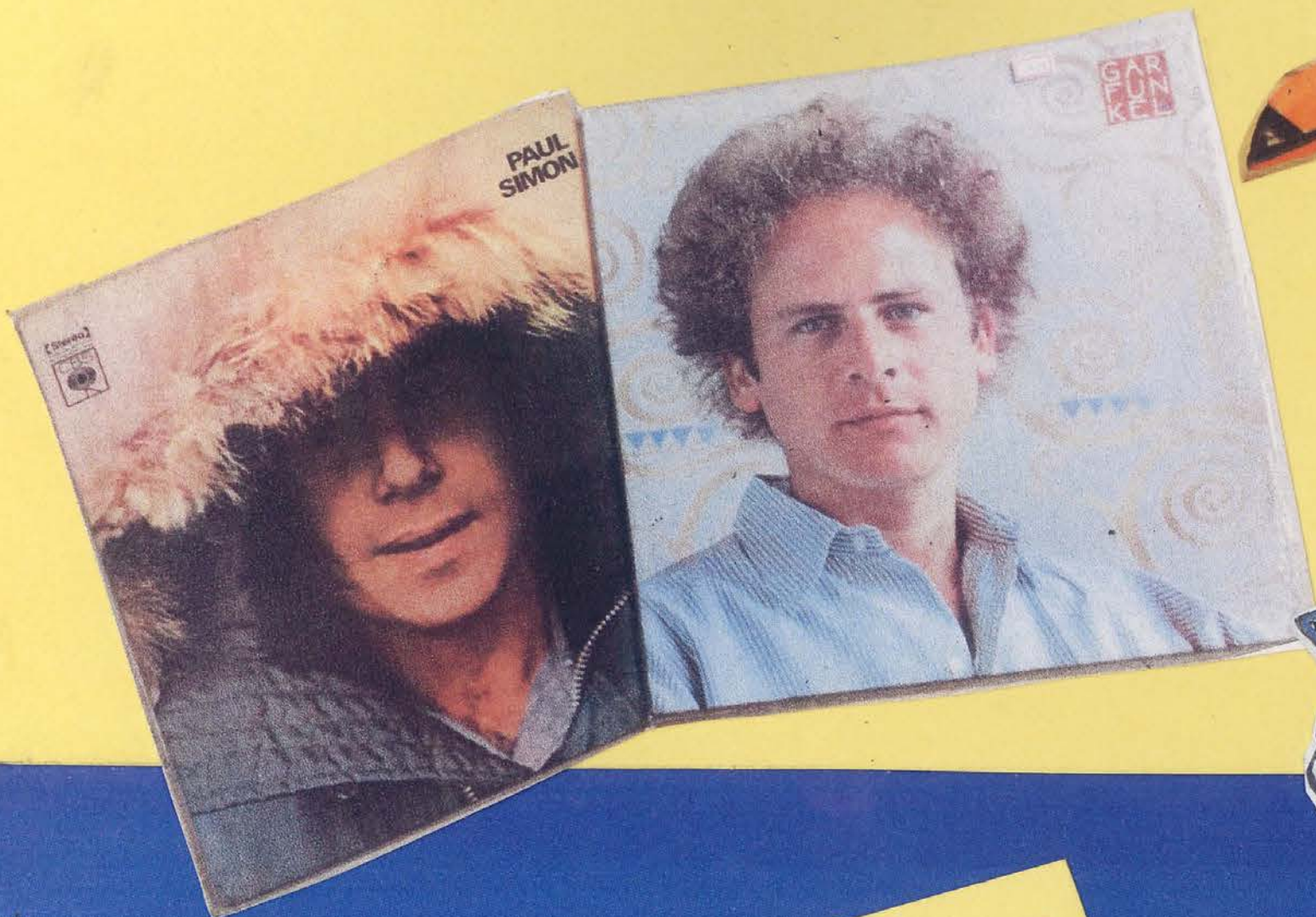
ビジネス街どまん中
パウリスタ大通りのわき道すぐ



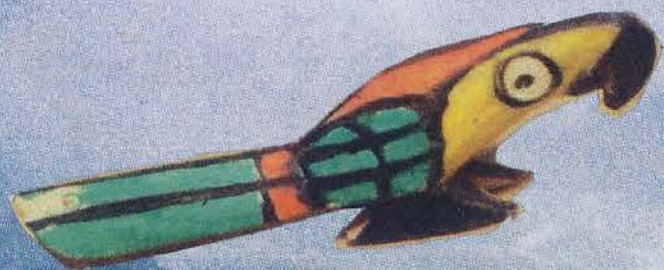
↑ 去年ちょっと習った
ポルトガル語は
すっかり忘れた

この
8月の3週間だけ
サンパウロに行って
きました

夫のアパートから
徒歩15分圏内
だけで日々を
過ごしてきました



2015.
ワタシは
ワタシは
BY GACHA





Simon & Garfunkel Web Forum Japan Off-Line Meeting 2015

<http://www.sandgforum.jp/>